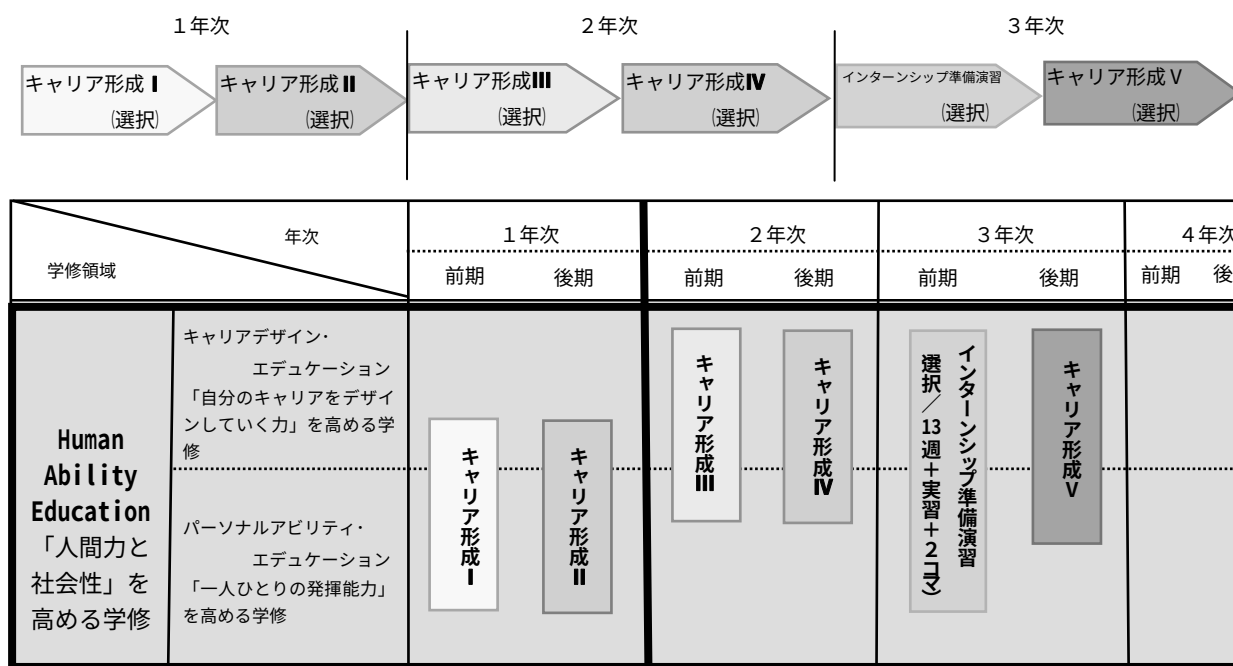


教養系科目について（2006から2009年度入学者に適用）

1 キャリア形成

キャリア形成科目は、1年次から3年次までを対象として開講されている科目です。下の図のように、キャリア形成に必要なテーマを、年次毎にステップアップする形で配しています。



雇用環境は、これまでの堅調な動きから一転、世界的な景気動向の影響に左右される”堅調～鈍化の波が短期間のタームで変動する”不安定状況になっています。経済の鈍化を背景に、業績不振、それに伴う雇用調整が行われつつあること、団塊世代の大量退職後の新卒補充が折り返したことで等々により、消極的な採用環境へと変化しつつあるのです。このような社会状況下では、企業は、より採用基準を厳しくし「少数精鋭の視点で、高い人材要件を求める」傾向を強めます。学生側としては、より豊かな人生を送る上で、そしてその第一歩を踏み出す就職活動のうえで、一層の“自己形成・キャリア形成”が大切になってきます。そのためにはまず、基盤となる“人間力”を十分に醸成し高めていく努力が必要になるでしょう。

社会では、求める社会人像として「生き方・仕事に対する目的意識が明確で自己成長に意欲的であること」が重要視されています。やりたいことに向かって行動し努力できるか、協調し切磋琢磨することができるか、体験から学ぶ力はあるか・・・等々のことが重要視されるわけですが、これはまさに「自分、将来、他者、仕事、成長といったことに真摯に向き合うことのできる力」を求めているのです。本来的なキャリア形成とは、よい職を得てキャリアを作るために必要な要素という狭義のことではなく、この「自分、将来、他者、仕事、成長といったことに主体的に向き合うことのできる力を作る」という、生きる力の根幹となる考え方にほかならないのです。そのような観点で大学生活を考えた時、4年間のキャンパス生活で「自分の進路を見出すこと」と「社会に価値を寄与する力を高めること」が、大きな目標になることは間違いありません。「キャリア形成科目」は、このような各人それぞれの進路の先にある社会生活で必要となる考え方や能力を習得するために設けられている科目で、本学の「成長支援第一主義」教育の一翼を担うものです。

その目的を、より具体的に示すと次のようなものになります。

1. 自分に期待し、自分の将来を展望できる力を養う
2. 大学生活を、自分の力で、価値あるもの・充足したものにできる力を養う
3. 大学生として、社会の一員として必要な「5つの力＝自己発見力、自己実現力、問題解決力、対人関係力、自己表現力」を養う
4. リアルティのある進路・職業観を形成する

このような目的を達成するために「キャリア形成科目」は、1年次から3年次後期まで「各学年次にやるべきこと」を、

ステップアップしながら履修していけるように、「キャリア形成Ⅰ」、「キャリア形成Ⅱ」、「キャリア形成Ⅲ」、「キャリア形成Ⅳ」、「キャリア形成Ⅴ」、「インターンシップ準備演習」という科目で構成しています。

なお、履修にあたっては、「キャリア形成Ⅰ」から順に履修することが望ましいのですが、どのキャリア科目からも履修は可能となっています（ただし、下位年次の学生が上位年次の科目を履修することはできません）。

（１）キャリア形成Ⅰ

１年次前期に開講する「キャリア形成Ⅰ」は、以降に開講する「キャリア形成Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ」の導入部として、大学生から社会人へ自己成長するための最も必要な基礎過程となっています。

「キャリア形成Ⅰ」の学修目的は、「自己発見力とポジティブ思考の形成」です。

ここで言う基礎過程とは、高校生から大学生への意識転換ということにとどまらず「これからの自分を作るために、本来の自分の良さや自分らしさを発見し直す」ことを意味しています。自分がどんな人間なのか分からない、やりたいことが分からない、自分との向き合い方が分からない……。あるいは、自分の良さや好きなところ、武器にしたい長所などをさらに伸ばすにはどうしたらいいのか。いずれの視点であっても、この１年次の時に「気づく（見つける）」ことがとても大切なのです。

その意味で、この「自分への新たな気づき（自分探し）」こそが、キャリア形成の最も重要なファクターであり第一歩であると言えるのです。

さらに、「ポジティブ思考（肯定的・前向きな考え方）ができるようになる」ことが、重要な目的になります。「ポジティブであること」は、将来どのような進路を歩むかにかかわらず社会に出た瞬間から必要条件として求められ、さらには人生の道程をも左右する要件です。短所と決め付けていること、できないと思い込んでいること、あきらめていること、苦手意識、目的をもてない……。等といったネガティブな部分をポジティブに変えることこそが、大学生活やそれ以降の社会人生活全般を充実させ自己成長していく鍵になるのです。「キャリア形成Ⅰ」は、大学生活のスタート時点で取り組んでほしい二つの重要事項に対する「考え方と取り組み方」を学びますので、できるだけ多くの学生の履修を望みます。

（２）キャリア形成Ⅱ

１年次後期に開講する「キャリア形成Ⅱ」の学修目的は、「自己実現力の形成」です。

大学生活を半年以上過ごしたうえで「自分」をより深く見つけ、「自分の能力を引き出す考え方を習得し、“成りたい自分に成る（自己実現）力”を高める」ことに取り組みます。

「人間としての根幹的な力、対人コミュニケーション力、自己実現に至るプロセス構築力」について、具体的に、かつ実践的に学びます。

「キャリア形成Ⅱ」は、「キャリア形成Ⅰ」を通じて見つけた自分の良さを、将来の進路に結びつける力とするためのブリッジになる内容であり、同時に、大学生活の集大成である就職活動時に求められる「人間力」を向上させるものでもありますので、できるだけ「キャリア形成Ⅰ」から継続した履修を望みます。

（３）キャリア形成Ⅲ

２年次前期に開講する「キャリア形成Ⅲ」の学修目的は、「職業観の形成」です。

自分の興味関心や職業観を「具体的な仕事に関係付けしていく」ことに取り組みます。

どのような仕事があるのか？ 業種業界とはどういうものなのか？ 企業に入った後はどのようにキャリアを積んでいくものなのか？ また、大学で学ぶことと仕事とはどのように関連するのか、社会で活かされるのか？ 業界研究はどのようにしたらいいのか？ そのようなことを幅広く考察しながら、自分の関心に沿った仕事について詳しく学んでいきます。

「入社後３年間で、３割もの若者が辞めていく」という現象が社会問題化していますが、この主な原因は「ミスマッチ」であると言われています。ミスマッチとは「イメージしていた仕事、会社と現実とのギャップ」、つまり「こんなはずじゃなかった……」ということです。せっかく仕事に就いたにもかかわらず、２～３年（キャリアとなるには短すぎる期間）で辞めてしまうことは、本人にとっても企業にとっても不幸なことと言わざるを得ません。

このミスマッチ現象を払拭するには、下記の事項が不可欠です。

- ・憧れや知名度などのイメージだけに固執するのではなく、「幅広い選択肢と選拓眼」を持つこと
- ・できるだけ「やりたい仕事を具体的にする」こと
- ・「自分はなぜこの仕事をやりたいのか、をしっかりと意味づける」こと
- ・やりたい仕事（及び業界）のことを、できるだけ「リアリティをもって理解する」こと
- ・「比較検討、取捨選択できる手法を身につける」こと

このような必要事項を習得することが、「キャリア形成Ⅲ」の目的です。キャリア形成Ⅰ・Ⅱの履修有無にかかわらず、できるだけ多くの学生の履修を望みます（ただし、１年次生は履修することができません）。

(4) キャリア形成Ⅳ

2 年次後期に開講する「キャリア形成Ⅳ」の学修目的は、“問題解決力の形成・向上”です。
特にこのプログラムでは、下記の 2 つの能力について習得・向上を目指します。

- ・問題解決力
- ・論理的思考力

昨今のような変化の激しい社会状況においては、様々な問題事象が起こり得ます。企業活動においても、問題に直面する場面は多く、その際には全力で問題に向き合い解決・克服していかなければなりません。そのため、とりわけ問題解決力は重要視されており、新入社員の資質条件としても重要視されています。

また、論理的思考力も、職務遂行・問題解決・成果創出の基礎資質として、業種・職種にかかわらず重要視されています。

「キャリア形成Ⅳ」では、この 2 つの重要な能力要件の向上を図るために、必要な事柄を、実践的なトレーニング・スタイルを用いて学び、向上を図ります。来るべき就職活動にも大いに役立つ内容ですので、できるだけ「キャリア形成Ⅲ」から継続した履修を望みます（ただし、1 年次生は履修することができません）。

(5) キャリア形成Ⅴ

3 年次後期に実施する「キャリア形成Ⅴ」の学修目的は、“自己表現・プレゼンテーション力の向上”です。

自己表現する力は、コミュニケーション・対人関係の核をなす点で、発揮能力の最たるものであると言えます。それによって意思疎通が図られ、相互の理解・納得が得られる、最も重要な能力要件です。3 年次は“社会と大学の接合を具体化（＝進路・就職実現）”する最も重要な時期となるため、特にプレゼンテーション力の向上を中心に、実践的なトレーニングを行ないます。また、論理的に考え社会的視野を伴った自己表現をできるようにするため“新聞を読みこなしていく力”も養います。

「キャリア形成Ⅳ」と連続して受講することで、“論理的で自己表現が豊かな、より円滑な対人関係が作れる力”の習得・向上が図れます。

キャリア形成Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの履修有無にかかわらず、できるだけ多くの学生の履修を望みます（ただし、1・2 年次生は履修することができません）。

(6) インターンシップ準備演習（国内実習、海外実習）

「インターンシップ」のための、事前研修プログラムです。「インターンシップ準備演習」の学修目的は“企業体験で必要となる実践力・発揮能力の向上”です。

近年、インターンシップは、通常の授業では体験できない「企業活動や職場の実態」「仕事の現実」などをリアルに体験できる非常に有意義な機会として、学生・企業双方から注目されているものです。

また、「海外インターンシップ研修」に参加する学生を対象に、別途「海外インターンシップ・クラス」を設置しています（横浜キャンパス・湘南ひらつかキャンパス双方に設置）。海外ビジネスキャリアが豊富な講師による、海外企業オフィスでの実際の英語の使い方、日本と海外でのワークスタイルや慣習の違い、マナー・コミュニケーションスタイルの習得、受付・店舗等での接客接遇の仕方、電話対応・伝言・報告の仕方等々を、実際のオフィスシーンを想定しながらトレーニングし身に付けていきます。また、英文履歴書の書き方も指導します。

なお、この授業は、国内・海外共に、インターンシップ（夏季休業中に行う）参加前の授業と、参加後の授業に分かれて構成されています。プレゼンテーション力や問題解決力を向上させたい、または、十分な時間をかけて事前準備にとりくみたいインターンシップ参加予定者は、この準備演習を大いに利用してください（ただし、1・2 年次生は履修することができません）。

2 人文の分野

過去から現在に至るまで、人はつねに「人間」の存在に関心を抱き、その探究に力を注いできました。「人文の分野」では、哲学・宗教・心理・教育・歴史・文学・芸術などの諸分野の学習を通して、人間の存在に関わる様々な事柄とその本質、あるいは人間が生み出した多様な文化とその価値を、これまでよりも広く深く学び、豊かな教養を身につけることを目的としています。学生の皆さんには、この分野の学修を通して人間社会がこれまで積み上げてきた多様な価値観と豊かな文化を理解し、国際社会で通用する幅広い視野と文化的感覚・知的能力を培っていただきたいと思います。

3 社会の分野

現代社会は多様化と複雑化の一途をたどり、便利さと同時に様々な問題をも生み出しています。例えば、国境を越えたヒト・モノ・カネの移動は、政治や経済のみならず教育や文化、さらには環境や食品などの分野にも大きな影響を与えています。このような現代社会をどのように把握したらよいのでしょうか。「社会の分野」における科目は、現代社会の多様な諸問題に対して、学際的かつ多面的な把握をするために必要な、様々な学問分野の基礎的概念（理論と体系）を学ぶことを目的としています。学生の皆さんには、政治学、経済学、法学、社会学などそれぞれの学問分野の知識や思考方法を身につけ、多様な問題を解決するために必要な能力を修得していただきたいと思います。

4 自然の分野

人文、社会、自然など、どのような分野であれ、私たちが何かの対象について理解しようとするとき、ただそれらを漠然と眺めているだけでは対象を理解することはできません。対象を理解するためには、それにふさわしい言葉、方法、道具からなる枠組みが必要になります。私たちを取り巻く自然の成り立ちや変化、また私たち人間と自然との関わりを理解しようとするときに、必要となる基本的な言葉、方法、道具を提供するのが「自然の分野」の科目群です。具体的には、自然を表現するために必要となる普遍的な言葉（概念、数式等）を提供するのが数学関連の科目であり、これらの言葉を用いて自然の成り立ちや変化を理解する方法と道具を提供するのが物理、化学、生物関連の科目です。さらに、これらの基本的な科目が、実際の社会でどのように応用されているかを知るのが工学関連の科目です。また、自然の分野を学ぶ上で必要となる、情報処理の考え方と方法を提供するのが情報関連の科目です。

自然の分野における考え方・方法と、人文や社会の分野における考え方・方法との違いを知ることは、自分の理解の幅を広げることにつながりますので、人文や社会の分野と自然の分野をバランスよく履修することを勧めます。

5 健康科学の分野

21世紀の財産は“健康”といわれます。生涯にわたって健康で明るく豊かな社会生活をおくるためには、健康の自己管理が重要といえます。しかし今日の社会は、科学技術の発展による生活の豊かさに伴って、IT（情報）の時代を迎えたことによるからだを動かすことの減少、運動不足に伴う基礎的な身体能力の低下、という特徴を持つに至っています。また情報過多や社会環境の変化から、身体感覚の変容、各種の不適応症状やストレス過剰、環境の変化に伴う自然性（ヒューマン・ネイチャー）の喪失、心身症の増大、人間関係の希薄さ、などの特徴も持つようになりました。これらを一言でいえば「からだの危機」と「心の危機」という2つの危機を抱えているといえるでしょう。更に、若者の体力が低下し危機的状況にある現在、早い段階に体力を回復させ、継続的に運動を実施することが望まれます。

本分野は、健康に関する理論と運動実践を通して、運動をする喜び、体力の維持増進、大学生活を快適におくるための健康管理、さらに、社会生活につながる健康の自己管理のための動機付けとなる知識とその方法を修得する科目群から構成されています。

人間はさまざまな適応能力をもっており、うまく適応することはうまく生きることにつながるといえます。健康科学を通して多くの経験と幅広い適応能力を身につければ、結果として人生をうまく生きることができるといえるでしょう。

(1) 目標

1. 健康に関する幅広い知識を修得する。
2. 体力を向上させる方法を認識する。
3. 効果的なトレーニング方法を理解する。
4. 健康にして豊かな体をつくる。
5. 将来よりよい社会をつくる一員としての素養を身につける。
6. 生涯学習に結びつく習慣を身につける。

(2) 開講科目

●「健康科学とスポーツⅠ」,「健康科学とスポーツⅡ」

健康をつくる方法を理論的に理解し実践と結びつけた科目であり、継続するところに意義がある。

授業科目名	健康に関する理論の内容 (中心的課題)	スポーツ実践の開講種目
健康科学とスポーツⅠ	(1) 健康学 (2) 体力・トレーニング	バスケットボール, トランポリン, サッカー, バドミントン, 卓球, ソフトボール, テニス, バレーボール, ゴルフ, ソフトラクロス, フィットネス
健康科学とスポーツⅡ	(1) 運動処方 (2) 生涯スポーツ	

●「スポーツ文化Ⅰ」,「スポーツ文化Ⅱ」

多くのスポーツ種目を幅広く経験することにより、各自の生涯スポーツの適正が見出せる。この「スポーツ文化Ⅰ・Ⅱ」は、スポーツを積極的に行うことにより体力の維持増進をはかり、リーダーシップ、フォロアーシップを理解する実践科目である。「スポーツ文化Ⅰ」(前期)は運動の基礎編、「スポーツ文化Ⅱ」(後期)は運動の応用編である。

開 講 種 目
バスケットボール, トランポリン, サッカー, バドミントン, 卓球, ソフトボール, テニス, バレーボール, ゴルフ, ソフトラクロス, フィットネス

●「スポーツ文化Ⅳ」

生涯スポーツとして、下表の種目を開講する。学内において基礎的な理論と技術・体力を身につけたうえで、適地で学外実習を行う。

種目	ゴルフ	マリンスポーツ	スキー
時 限	火曜日 3 限, 4 限	金曜日 2 限, 3 限	木曜日 4 限, 金曜日 3 限
定 員	各時限 20 名	各時限 20 名	各時限 20 名
演習日	8 月上旬 3 泊 4 日	9 月上旬 3 泊 4 日	2 月下旬 3 泊 4 日
場 所	関東近郊ゴルフ場	江の島付近	北海道, 長野県(予定)
費 用	40,000 円	40,000 円	55,000 円
備 考	コースで 3 ラウンドする予定	ヨットやカヤックを実施する予定	スキーとスノーボードを実施する予定 SAJ バッジテストあり

※実習の内容は、授業時に説明します。

(3) 評価の方法

授業回数に対して 3 分の 2 以上の出席が、評価対象の必須条件となります。3 分の 2 以上の出席がない場合は評価の対象になりません。

評価は、授業への受講態度や積極性、実技の習熟度などをもとに評価します。また、実技テストや種目に関するレポートを課す場合があります。